

## 看護研究発表会を体験した学生の学びと運営上の課題

Issues Concerning the Administration and Learning in  
Students who experienced Nursing Research Presentation中本 明世<sup>1</sup>, 平賀 元美<sup>2</sup>, 菱田 知代<sup>3</sup>  
高橋 清子<sup>4</sup>, 高見 清美<sup>5</sup>, 野原 留美<sup>6</sup>

## 要旨

本研究は、看護研究発表会を体験した学生の学びと運営上の課題を明らかにすることを目的とした。看護研究発表会に参加した看護学部4年生67名を対象とし、研究計画書作成状況、発表会を通して得た学生の学び、発表会運営内容の適切性について自記式質問紙調査を実施した。その結果、研究計画書作成に要した期間は平均6.4ヶ月、自己評価点は平均67.3点であり「研究の背景の記述」に最も困難を抱いていた。発表を通じた学びとして【わかりやすいプレゼンテーション方法について学んだ】、【看護研究への関心が高まった】など5カテゴリ、質疑応答からの学びとして【関心をもつことが大切である】、【研究への理解が深まる】、【適切な応答が大切である】の3カテゴリ、今後の活用については【プレゼンテーションに活用する】、【今後の看護研究に活用できる】、【論理的視点をもち関心を高める】の3カテゴリが抽出された。発表会の時間配分について「ちょうどよい」との回答は、口演時間で62.1%、質疑応答時間で77.3%であった。また開催時期について「ちょうどよい」との回答は47.0%であった。看護研究発表会は他者と研究課題を共有する大切さに気づきを得ることのできる機会であり、看護の計画的な展開能力の向上に繋がる一助となるが、より効果的な発表会運営に向けて、時間配分や開催時期を検討する必要がある。今後は学生がより発展的に看護研究に対する関心を高められるよう、看護研究発表会の充実化を図り、高い教育効果を目指した看護研究の教育方法を考える必要性が示唆された。

キーワード：看護学生, 看護研究, 看護研究発表会, 学び

Nursing students, Nursing research, Nursing research presentation,  
Learning

## I. 緒言

看護実践の基礎となる科学的知識体系を発展させていくためには、看護研究は必須である（黒田、2012）。専門職者である看護師が、臨床、教育、管理の現場に生じている様々な疑問に、積極的に研究的に取り組むことによって、その人の実践のあり様も、看護の知識体系も改善できるようになる（南、2008）。「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」最終報告（2011、文部科学省）では、「学士課程においてコアとなる看護実践能力

と卒業時到達目標」（以下、卒業時到達目標）として、「根拠に基づいた看護を提供するための情報を探索し活用できる」「看護実践において理論的知識や先行研究の成果を探索し活用できる」の2点が掲げられている。その教育内容として文献検索方法、文献の批判的検討、基本的な研究方法、研究成果の解釈と活用等が例示されており、これらは「看護の計画的な展開能力」を身につけるために重要なプロセスである。

A大学では「看護研究」を看護学部4年生対象の必修科目とし、本科目の教育目標を「看護者が

- |   |                  |        |      |
|---|------------------|--------|------|
| 1 | Akiyo NAKAMOTO   | 千里金蘭大学 | 看護学部 |
| 2 | Motomi HIRAGA    | 千里金蘭大学 | 看護学部 |
| 3 | Tomoyo HISHIDA   | 千里金蘭大学 | 看護学部 |
| 4 | Sayako TAKAHASHI | 千里金蘭大学 | 看護学部 |
| 5 | Kiyomi TAKAMI    | 千里金蘭大学 | 看護学部 |
| 6 | Rumi NOHARA      | 千里金蘭大学 | 看護学部 |

受理日：2017年9月8日

科学的な実践を行う上で、看護の事象を科学的に捉え、看護上の課題について科学的な分析や看護実践の根拠についての探求を行い、そこから得られた知見を実践に活用できるための基礎的能力を養うこと」としている。この科目では研究計画書の作成を必須としており、学生は担当教員の指導下で研究計画の立案までのプロセスを実践的に学んでいる。この科目の成果（研究計画書）は製本され、学科内で管理されており、製本された研究計画書は看護研究のテーマ選定の参考などのために閲覧されている。これまで、研究計画書の内容を他者に発表する場合は学科全体では設けておらず、各領域やゼミナール担当教員の裁量に任されていた。しかし、平成28年度から、学生の成果を広く共有し看護研究への理解を深め、関心を広げることを目的に看護研究発表会を実施することとなった。研究計画書の作成プロセスにおいて卒業時到達目標に挙げられた能力を養うことはできるが、他者の研究計画発表を聴くことによって学生間の情報共有や異なる分野の研究を広く知る機会となり、看護の計画的な展開能力の向上に繋がる学びを得ることができると考えられる。

看護研究を通した看護学生の学びに関する先行研究では、卒業研究論文の実態調査（津本・福岡・小林，2007；津本・佐藤・武田ら，2013）や看護研究計画書作成を通しての学生の成長を明らかにした研究（炭谷・原・山元，2012）、学生が考える看護研究の意義を明らかにした研究（中根・阿部，2010）、さらにテレビ会議システムで他校の看護研究発表会に参加した2年次看護学生の学びを明らかにした研究（濱田・橋本，2014）などがあり、看護学生の看護研究の意義や指導内容が検討されている。

そこで本研究では、看護研究発表会を体験した学生の学びと運営上の課題を明らかにすることで、教育目標を達成するための効果的な看護研究発表会運営について示唆を得るとともに、看護研究指導体制全般の充実を図る上での資材を得ることができるのではないかと考えた。

## Ⅱ. 研究目的

本研究は、看護研究発表会を体験した学生の学びと運営上の課題を明らかにすることを目的とする。

## Ⅲ. 看護研究発表会の概要

### 1. 看護研究発表会の目的

代表学生による看護研究計画書の発表と教員や学生による意見交換の場を経験し、研究への理解を深め、関心を広げることができる。

### 2. 開催時期

2016年12月

### 3. 参加者

平成28年度に看護研究に取り組んだ学生（4年生）と、看護学部全教員。

### 4. 発表者

各領域（8領域）から選出された代表者各1名。当日1名の欠席があり、計7名が発表した。

### 5. 時間配分・構成

発表時間は各5分とし、4領域の発表の後に15分の質疑応答の時間を設け、続いて4領域の発表を行った後に15分の質疑応答の時間を設けるという2部構成で行った。座長は看護学部教授が担った。

なお、発表会では聴衆となる学生の理解を深めるために資料の配付を許可するが、不正行為のリスクを低減させるため、配付資料の回収等、発表者への倫理的配慮を徹底した。

## Ⅳ. 方法

### 1. 調査対象

看護研究発表会に参加したA大学看護学部 4年生約67名。

### 2. 調査時期

2016年12月

### 3. 調査方法

無記名自記式質問紙にて目的に応じた調査を実施した。

### 4. 調査項目

- 1) 看護研究計画書作成状況：看護研究計画書作成に要した期間、自身の研究計画書の満足度、プロセスにおいて困難と感じたこと、ゼミ等での研究発表の経験の有無
- 2) 看護研究発表会を通して得た学生の学び：発

表による学び、質疑応答での学び、今後の課題など

- 3) 看護研究発表会運営について：口演時間・質疑応答時間の適切性、開催時期の適切性とその理由

## 5. 分析方法

質問紙調査のデータのうち、選択式の設問は単純集計を行い、自由記述回答は質的帰納的に分析した。質的帰納的な分析においては、看護研究発表会を通して得た学びに関する記述を抽出し、意味内容の類似性・相違性に基づきサブカテゴリ・カテゴリ化を行った。

## 6. 倫理的配慮

対象者には、質問紙配布時に研究の目的、方法、成績評価には無関係であること、研究調査の参加は自由意思であること、無記名であり結果は統計的に処理されるため個人は特定されないこと、質問紙の回収をもって研究への協力に同意したとみなされること、データは厳重に管理し研究目的以外で使用しないことについて、文書および口頭で説明を行った。なお、本研究はA大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。(承認番号283)

## V. 結果

看護研究発表会に参加した看護学部4年生67名に質問紙を配布し、66件の回答を得た(回収率98.5%)。回収された66件を分析対象とした(有効回答率100%)。

### 1. 対象者の看護研究計画書作成について

対象者が研究計画書作成までに要した期間は、平均が6.4ヶ月であった(SD2.09、range2-11)。これまで所属するゼミや領域において、看護研究計画書を発表する機会があった対象者は81.8%であった。

自分自身の看護研究計画書に対する自己評価点は、平均67.3点(SD13.09、range30-98)であった。また、自分自身の研究計画書に満足しているかという問いに対し、「とても満足」6.1%、「満足」57.6%、「どちらともいえない」34.8%、「不満」1.5%の回答を得た。(図1)

看護研究計画書作成のプロセスにおいて困難に感じたことについては、一番回答の多かったものは

「研究の背景の記述」(38件)、次いで「研究テーマの決定」(34件)、「研究方法の記述」(30件)であり、困難に感じたことはないと答えた対象者は0件であった。(図2)

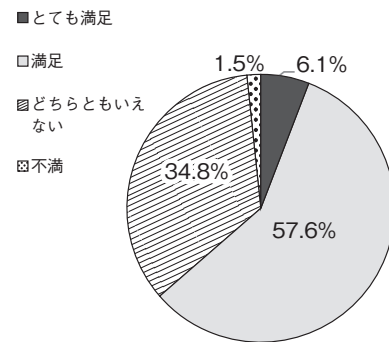


図1. 自身の研究計画書に満足しているか

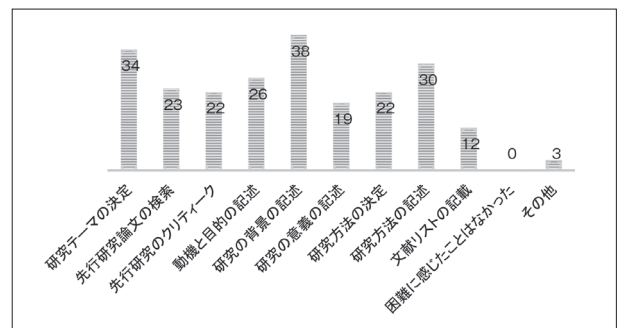


図2. 看護研究プロセスで困難に感じたこと

### 2. 看護研究発表会における学び

以下、カテゴリを【】、サブカテゴリを『』で示す。

看護研究発表会から学んだこととして77の記述内容から【わかりやすいプレゼンテーション方法について学んだ】、【看護研究への関心が高まった】、【様々な看護研究を知ることができた】、【良い看護研究がわかった】、【自分の研究を振り返ることができた】の5カテゴリが抽出された。(表1)

【わかりやすいプレゼンテーション方法について学んだ】は、『他者に理解を得やすいプレゼンの仕方を学んだ』『見やすい発表資料(スライド)を作る大切さを学んだ』『研究発表会について知ることができた』『十分な準備が必要である』の4サブカテゴリで構成された。【看護研究への関心が高まった】は、『他領域の研究について勉強できる機会となった』『関心領域以外の研究にも興味をもった』『新たな視点に気づいた』『臨床で役立つようなことを学べた』の4サブカテゴリで構成された。【様々な看護研究を知ることができた】は、『明らかになっていないことが多いと知った』『様々な研究内容を知ることができた』『みんなが頑張っている成果を



知ることができた』『疑問が解決した』の4サブカテゴリで構成された。【良い看護研究がわかった】は、『根拠がしっかりしていた』『動機がしっかりしていた』の2サブカテゴリ、【自分の研究を振り返ることができた】は、『自分の改善点がわかった』『自分の研究への姿勢を反省した』の2サブカテゴリで構成された。

質疑応答から学んだこととして28の記述内容から【関心をもつことが大切である】、【研究への理解が深まる】、【適切な応答が大切である】の3カテゴリが抽出された。(表2)

【関心をもつことが大切である】は、『疑問をもって発表を聴くことで質疑応答が充実する』『他の人がどのような視点をもっているのか知ることができる』『質問者側にも事前知識が必要である』の3サブカテゴリで構成された。【研究への理解が深まる】は、『発表のみでは十分理解できなかったことを知ることができる』『疑問を解決することができる』『今後の研究に役立つ』『新たな気づきがある』『具体的な研究内容を知ることができる』の5サブ

カテゴリで構成された。【適切な応答が大切である】は、『論理的で丁寧な応答が大切である』『建設的な応答が良い』の2サブカテゴリで構成された。

看護研究発表会での経験や学びを今後どう活用できるかについては47の記述内容から【プレゼンテーションに活用する】、【今後の看護研究に活用できる】、【論理的視点をもち関心を高める】の3カテゴリが抽出された。(表3)

【プレゼンテーションに活用する】は、『プレゼンテーションを行う際に活かせる』『他者から理解を得やすい伝え方を考える』『質疑応答の質を向上させる』の3サブカテゴリで構成された。【今後の看護研究に活用できる】は、『自分の研究への課題を明確にできる』『臨床での看護研究へ活用できる』の2サブカテゴリで構成された。【論理的視点をもち関心を高める】は、『日々疑問を追求する姿勢をもつ』『様々な分野への関心をもつ』『論理的な視点をもつ』『視野を広げることができる』の4サブカテゴリで構成された。

表1. 看護研究発表から学んだこと

カテゴリ	サブカテゴリ
わかりやすいプレゼンテーション方法について学んだ	他者に理解を得やすいプレゼンの仕方を学んだ
	見やすい発表資料(スライド)を作る大切さを学んだ
	研究発表会について知ることができた
	十分な準備が必要である
看護研究への関心が高まった	他領域の研究について勉強できる機会となった
	関心領域以外の研究にも興味をもった
	新たな視点に気づいた
	臨床で役立ちそうなことを学べた
様々な看護研究を知ることができた	明らかになっていないことが多いと知った
	様々な研究内容を知ることができた
	みんなが頑張っている成果を知ることができた
	疑問が解決した
良い看護研究がわかった	根拠がしっかりしていた
	動機がしっかりしていた
自分の研究を振り返ることができた	自分の改善点がわかった
	自分の研究への姿勢を反省した

表2. 質疑応答から学んだこと

カテゴリ	サブカテゴリ
関心をもつことが大切である	疑問をもって発表を聴くことで質疑応答が充実する
	他の人がどのような視点をもっているのか知ることができる
	質問者側にも事前知識が必要である
研究への理解が深まる	発表のみでは十分理解できなかったことを知ることができる
	疑問を解決することができる
	今後の研究に役立つ
	新たな気づきがある
適切な応答が大切である	具体的な研究内容を知ることができる
	論理的で丁寧な応答が大切である
	建設的な応答が良い

表3. 看護研究発表会での経験や学びを今後どう活用できるか

カテゴリ	サブカテゴリ
プレゼンテーションに活用する	プレゼンテーションを行う際に活かせる
	他者から理解を得やすい伝え方を考える
	質疑応答の質を向上させる
今後の看護研究に活用できる	自分の研究への課題を明確にできる
	臨床での看護研究へ活用できる
	日々疑問を追求する姿勢をもつ
論理的視点をもち関心を高める	様々な分野への関心をもつ
	論理的な視点をもつ
	視野を広げることができる

### 3. 看護研究発表会運営について

5分の口演時間については、「ちょうどよい」62.1%、「やや短い」30.3%、「短い」7.6%の回答を得た。(図3)

15分の質疑応答時間については、「長い」1.5%、「やや長い」18.2%、「ちょうどよい」77.3%、「短い」3.0%の回答を得た。(図4)

発表会開催時期(12月下旬)については、「遅い」1.5%、「やや遅い」22.7%、「ちょうどよい」47.0%(無回答28.8%)の回答を得た(図5)。「やや遅い」と回答した理由として「国家試験が迫っている時期であるため」という内容が多くみられた。また、「ちょうどよい」と回答した理由としては、「実習や看護研究が落ち着いている時期だから」「看護研究の提出期限後で準備時間があったため」という

内容がみられた。

発表会の運営全体に関しては「時間が短い」や「資料がなくなりにくい」といった少数意見があった。

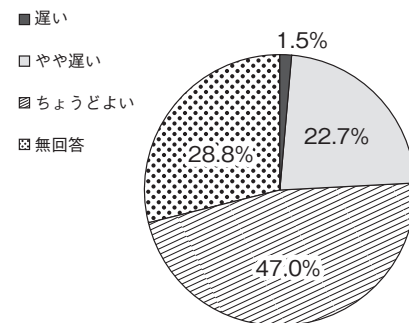


図5. 発表会開催時期について

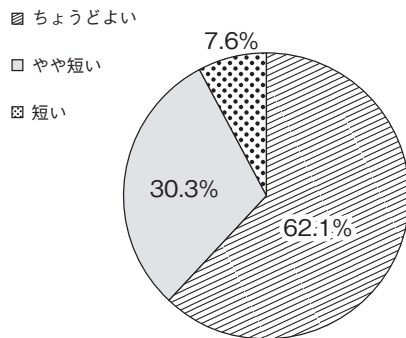


図3. 口演時間について

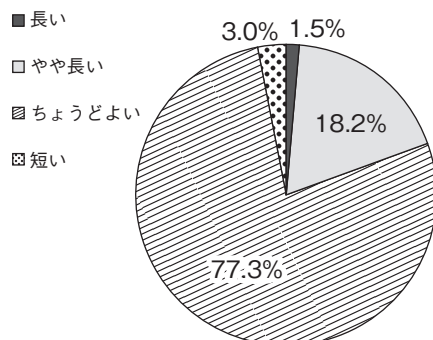


図4. 質疑応答について

## VI. 考察

自分自身の研究計画書に「とても満足」「満足」と考えている対象者が63.7%であったにも関わらず、研究計画書への自己評価点の平均は67.3点と、やや低い点数であった。満足を得ている対象者が比較的多いことに対しては、看護研究発表会開催が看護研究計画書提出期日の約1週間後であったことから、看護研究計画書完成の達成感の表れであると考えられるが、一方で自己評価点が低いのは、看護研究発表会で他者の発表内容を聴き、自身の研究計画書内容と比べて不十分さや課題を見出したからではないかと推察する。学生が考える看護研究の意義を明らかにした中根ら(2010)は、看護学生が研究発表を行い会場から質問や感想をもらうことで自身の研究内容を振り返り、さらに理解を深めることができたと述べ、それにより他者の発表を興味・関心をもって聞き、共有学習・情報交換ができたと推察している。本研究における対象者は、ほとんどが発表者ではなく聴衆としての発表会参加ではあったが、発表を聴くことで自

身の研究計画内容を振り返り、学びを深めていると考える。看護研究発表会に参加したことでの学びの結果からも、【看護研究への関心が高まった】、【様々な看護研究を知ることができた】、【自分の研究を振り返ることができた】といった学びが明らかとなっている。また、質疑応答からも、【関心をもつことが大切である】、【研究への理解が深まる】、【適切な応答が大切である】といった学びを得ていることから、対象者は発表会を通して看護研究への関心を高めただけでなく、看護研究をより充実させるための思考や態度に関する学びも得ていたと考えられる。広瀬（2000）は、学生が論文発表を聴講することにより物事の見方の差異を感じたり、他の学生の論評をすることにより批判する力も学んだり、自身の研究方法と違う研究方法に興味関心を抱いていたことを明らかにしている。A大学における看護研究発表会では在籍するゼミナール以外の分野の研究計画の発表も聴講するため、自身のこれまでの関心領域への学びや自身の研究と異なる研究方法への関心だけでなく、研究分野の視野を新たに広げることに繋がったのではないかと考えられる。したがって、看護研究発表会は、単に研究計画書完成の達成感に留まらず、探究心をもって看護に携わる意欲を高め、看護の計画的な展開能力の向上に繋がる一助となり得るものと推察できる。

さらに、対象者は看護研究発表から【わかりやすいプレゼンテーション方法について学んだ】り、発表会での学びを今後、【プレゼンテーションに活用する】と考えているなど、プレゼンテーションについても関心を寄せていた。炭谷ら（2012）は、看護学生が研究計画の発表を行うことで解り易い発表のあり方や質疑応答の仕方を学び、興味のなかった分野の知識も得ることで自分の糧となったことをあきらかにしている。また、濱田ら（2013）は、看護学生が研究発表会に聴衆する側として参加した体験から、聞き手らに解りやすく伝えることを考えさせられ、パワーポイントの見え方や相手への伝わり易さも考えることが大切であることを学んでいたと述べている。本研究においても、発表会を通して他者に伝わりやすいプレゼンテーションを行うことの意義を捉えていると考えられ、看護研究発表会は他者と研究課題を共有する大切さにも気づきを得ることのできる機会であるといえる。

一方で、運営面での課題も明らかとなった。5

分の口演時間について62.1%の対象者が「ちょうどよい」と回答したが、30.3%の対象者は「やや短い」と回答しており、約3分の1の対象者は口演時間が短いと評価していた。これは、5分では発表内容が聴衆である対象者に十分伝わらなかったことが要因であることも考えられる。限られた時間内で簡潔かつ解りやすくプレゼンテーションを行うことは学生にとって容易なことではない。特に口頭発表は短いため、より効果的に発表を行うには聴いている人にわかりやすく、しかも面白さを感じてもらふ必要がある（宮島, 2005）。したがって、今後は運営側が事前に効果的なプレゼンテーション方法について教授するなどし、発表者が自信をもって限られた時間内で的確に発表できるよう、体制を整える必要がある。15分の質疑応答時間については、77.3%の対象者が「ちょうどよい」と回答していた。この15分で3～4題の発表に対する質疑応答を行ったが、疑問を解決したり、より関心を高めるための質疑応答時間として15分の時間確保は適正であったと考える。

また、発表会開催時期については、22.7%の対象者は「やや遅い」と回答しており、その理由に国家試験が迫っている時期であるからとの回答が多くみられた。一方で「ちょうどよい」と回答した理由は、実習や看護研究が落ち着いている時期であることがあがっていた。これらのことから、学生の学習に不利益のない時期であり、かつ看護研究発表会での学びをより深めることのできる時期を再検討する必要がある。

以上より、今後は学生がより発展的に看護研究への関心を広げていけるよう、看護研究発表会の充実化を図り、さらに高い教育効果を目指した看護研究の教育に取り組む必要があると言える。

一方、看護研究計画書作成のプロセスにおいて困難を感じたこととして、「研究テーマの決定」「研究の背景の記述」が多くあがっていた。研究テーマを絞り込むことは研究の全プロセスの中で一番重要であり、一番難しい点である（黒田, 2012）。テーマの絞込みから研究の背景を記述するプロセスにおいて、文献検索と文献検討には時間がかかり、徹底的に系統的に着実に行う必要がある（黒田, 2012）が、学生は先行研究をクリティークし、研究課題を明確にして背景を論理的に記述することに主に困難を抱えていると言える。研究テーマや背景の記述へのヒントを与えるきっかけとして、看護研究計画書作成に着手する前に、上級生



の看護研究発表会を聴講し、看護研究へのイメージを掴むことも有用ではないかと考える。濱田ら(2013)は、上級生の看護研究発表会に参加した学生の学びとして、「未知な看護研究が具体化する」「看護について深く考えさせられる」「看護や研究に対する内発的動機付け」などがあることを明らかにしており、自発的な探究活動であると推察している。このことから、これから看護研究に取り組む学生が上級生の看護研究発表会を聴講することで、看護研究計画書作成に向けたイメージを掴むことができ、研究テーマの決定や背景の記述へのヒントを得ることができると言える。A大学では、看護研究計画書を作成した当該学生以外は自由参加としたが、次年度に履修する学生も多く参加していた。今後も、当該学生以外の学生へも発表会参加を呼びかけ関心を高めることで、次年度に看護研究を履修する学生にとって看護研究計画書作成の際の一助となるのではないかと考える。

## VII. 結論

1. 研究計画書作成に要した期間は平均6.4ヶ月、自身の研究計画書に満足しているものは63.7%、自己評価点は平均67.3点であり「研究テーマの決定」と「研究の背景の記述」に多くが困難を抱いていた。
2. 看護研究発表会を通じた学びとして【わかりやすいプレゼンテーション方法について学んだ】、【看護研究への関心が高まった】、【様々な看護研究を知ることができた】、【良い看護研究がわかった】、【自分の研究を振り返ることができた】の5カテゴリ、質疑応答からの学びとして【関心をもつことが大切である】、【研究への理解が深まる】、【適切な応答が大切である】の3カテゴリが抽出された。また、今後の活用については【プレゼンテーションに活用する】、【今後の看護研究に活用できる】、【論理的視点をもち関心を高める】の3カテゴリが抽出された。
3. 発表会の時間配分について、口演時間は「ちょうどよい」62.1%、「やや短い」30.3%、質疑応答時間は「ちょうどよい」77.3%であった。また開催時期については、「やや遅い」22.7%、「ちょうどよい」47.0%であった。
4. 看護研究発表会は他者と研究課題を共有する大切さに気づきを得ることのできる機会であ

り、看護の計画的な展開能力の向上に繋がる一助となるが、より効果的な発表会運営に向けて、時間配分、開催時期を検討する必要がある。

## VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、A大学で初めて開催した看護研究発表会参加によるデータであるため、不慣れな運営が学生の学びに影響したことも否めない。本研究によって運営上の課題も明らかになったことから、学生にとって深い学びを得られるよう発表会運営の体制を整えることに加え、看護研究指導の充実化に向けて看護研究発表会による教育的効果を明らかにしていく必要がある。

## 謝辞

研究にご協力頂きましたA看護系大学の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究の結果の一部は、第37回日本看護科学学会学術集会にて発表を行った。

## 文献

- 濱田美由紀, 橋本笑子. (2014). テレビシステムで他校の看護研究発表会に参加した2年次看護学生の学び. 中国四国地区国立病院附属看護専門学校紀要, 9, 121-128
- 黒田裕子. (2012). 黒田裕子の看護研究step by step第4版. 医学書院.
- 南裕子. (2008). 看護における研究. 日本看護協会出版会.
- 宮島朝子. (2005). 研究成果のまとめ・発表. 横山美江(編), よくわかる看護研究の進め方・まとめ方(pp. 115-121). 医歯薬出版.
- 文部科学省「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」. (2011). 学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/)
- 中根洋子, 阿部幸恵. (2010). 学生が考える看護研究の意義 初めての看護研究および論文発表を通して. 東京医科大学看護専門学校紀要, 20(1), 1-4
- 炭谷靖子, 原元子, 山元恵子. (2012). 看護研究

計画書作成をととしての学生の成長. 共創福祉,  
7(1), 1-10

津本裕子, 福間美紀, 小林裕太. (2007). 看護学  
生の卒業研究論文の実態調査-過去5年間の研  
究内容分析-. 島根大学医学部紀要, 30, 23-33

津本裕子, 佐藤美紀子, 武田裕子, 井上和子, 吉  
野拓未, 小林裕太. (2013). 看護学生の卒業研  
究論文の実態調査-6-10期生の研究内容分析-.  
島根大学医学部紀要, 36, 1-12